番外編

褒めることを知らない妻①

土居　修

農作業を終えた神無月の夕刻、風呂上がりのビールを飲んでいると、妻が一通の封書を差し出した。涼やかな瞳に優しい笑みを湛えている。凛として美しい女性だと思う。見ると、伊藤園新俳句大賞事務局の文字。応募しちょったがと答えて、開封した。新型コロナウイルス感染禍のために例年より進行が遅れたことのお詫びとともに、一次・二次の審査が終了し、次の審査を進めるために作者・作品に関する内容を確認したいという趣旨が書かれてあった。

新俳句大賞は1989年に始まっている。第1回の応募句数は4万1373句であったが、31回を数える今回では195万4888句であるという。伊藤園が「独自のターゲティング戦略」として行った文芸コンクールは、いまや日本最大級の国民的行事になっているといってよい。

ビールを呷って、どんなもんだいと台所に立っている妻に胸を張った。天賦の才能が正当に評価された安堵感とともに、ホップの苦みが満身を駆け巡っていく。

「まだ入賞したわけじゃ、ないでしょ」と冷たく言い放つ妻。

そのとおりであった。一次・二次の審査を通過したにすぎない。しかし、それにしても思った。少しぐらいは私を褒めてもいいのではないか。褒めることを知らない妻。台所で長ネギを切るのに余念がない。

入賞すれば、ラベルに私の作品と名前が掲載されたペットボトルが全国で販売されるのである。もしかしたらと心が弾んだ。大学時代の友人に私の消息の一端を知らせる機会となるのではないか。これといった理由もなく、時間の経過とともに疎遠になってしまっている彼等を懐かしんでいると、不意に「青春」がよみがえってきた。

国文科の教室で初めてあったとき、たかみ（仮名）のほのかな石けんの香りに魅了され、図らずも「美貌の女（ひと）」と叫んでいた。高知県の風土では絶対に醸し出せない清潔感であった。授業を抜け出しては喫茶店で、夕闇が迫れば居酒屋で男の美学と鮮烈な叙情を語ることが私の東京での青春となった。歌が巧く、詩情豊かに歌う『大阪ラプソディー』は何度聴いても飽きることはなかった。

有子（仮名）は背が高かった。178㎝の彼女と並んで歩いていると、すれ違う人々はみな振り返った。妥協のない思索をする女性であったが、「背が高くって、ごめんなさい」と即物的に呟く彼女を見るのは辛かった。線香花火が大好きで、「牡丹」「松葉」「柳」「散り菊」と燃えながら変化する風情に陶酔していた。武蔵野の面影を残す深夜の公園で見せた涙の由縁を遂に問うことができなかった青春。

屈託がなく純真で無邪気だった明代（仮名）。3年次の夏に帰省する私に付いてきた。

「修君が嫁を連れてきたぞ」と近所で噂の種にもなったが、おばさん連中に会うたびに殊更しおらしく振る舞う姿態には閉口した。翌年には、「教員採用試験があるから」と告げたが、「いいよ、別に」と意に返すことなく付いてきて、さすがに母親に呆れられた。当時流行っていたディスコにも頻繁に通った青春。

無頼の季節をともに過ごした男たちの表情も浮かんできた。しかし、幾人かがすでに鬼籍に入っているというせつなさがあった。振り返れば、身を切られるような痛み。嗚咽する姿を妻に知られてはならないと骨を折った生々しい記憶。

霜月になった。黄昏を仰ぎながら、青春も遠く去り、朱夏の記憶も色あせてしまったと嘆いていたら久しぶりに日本酒が飲みたくなった。私は今、白秋を生きているのか、それとも玄冬をむかえているのかと妻に問いかけて、八代亜紀の「舟唄」の冒頭を口ずさんだ。「お酒はぬるめの燗がいい　肴はあぶったイカでいい　女は無口なほうがいい」

「あぶったイカなんて、高かすぎるでしょ、どこにそんなお金があるのよ、そもそもどうして毎日飲むの、もったいないと思わないの。まったく、なにを考えて生きているのよ」

ひとしきり喋ったあとで、「自分で買ってね」となおもとどめを刺す妻。

女の狂気に怯みながら、「女は無口なほうがいい」としみじみと思った。阿久悠はえらかったのだと感心しながら飲んでいると、

「また、届いているわ」といって、思い出したように大きな封筒を卓上に置いた。さりげなく封を切ると、A4版の表彰状。「都道府県賞に選ばれましたのでここに表彰いたします」と認められていた。

「うっそー」

妻の叫びに、鳥肌が立った。57歳の熟女が発することばではない。うら若き女性にのみに許されている言語ではないのか。

「で、どんな句なの」

「えっ、聞きたいが。どうしようかな」

あえて言い惜しんだ。懇願する哀れな妻の姿を眺めながら、極上の快感に酔い痴れるはずであった。

「別に。でも、いいたいんでしょ」

なんと、浅はかな策略であったことか。声涙ともに下るような悲痛。優位に立つにはどうすればいいのだろうと考えていたら、酔いが回ってきた。

この番外編の表題を「褒めることを知らない妻」とすることに逡巡した自分がたまらなく恥ずかしい。今、見事な表題であると宣言することに些かの迷いもない。

（次号に続く）

高退協文芸

俳句

花蘇鉄の四季

小澤　幸泉

山茶花の宿をさがしに行ったまま

M兄（元高知センター合唱団団長岡村万里）逝去

歌声にのせて君逝く冬の空

生きている生かされ仰ぐ冬銀座

くやしくて落ち葉の敷地踏み散らす

川柳

帆傘集

小澤　幸泉

八十歳やっと独りになりました

眼が覚める今日も生かされ生きてゆく

咲けや咲けコロナ押しのけ咲きほこれ

笑顔だけ残して君は先に逝く

トーストをちぎっては食べ喰いちぎる

もつれてもまた解いては織り直す

八十代もうひと花咲かせたい

短歌

カンタービレ

田上悦子

短歌でもカンタービレが大切と舌頭千転こころして詠む

よく来たと夫指先でガラス越し窓にくの字の守宮を撫でる

春の庭写る賀状を子に送る五月に会える祈りを込めて

シリア難民

山本晶子

売るために臓器切りとられ死んでいしシリアの少年レバノンに逃れ

（NHKスペシャル「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」を見て三首）

腎臓を一つ売りたる金銭にて生きのびているシリアの女性

友がよく行きしシリアはのんびりと人々平和に暮らしおりしに

畑田重夫先生

叶岡淑子

元旦に届きし賀状その中に九十七歳畑田重夫先生

（国際政治学者。団体顧問。かつて講演等でしばしば来高も。）

コロナ禍に入院拒まれ急死せる教え子悼む投稿光る

（2月4日付しんぶん赤旗「読者の広場」欄）

全国へ今も鮮やか畑田節　生きる力を受け取る我ら

第180回高退協読書会

4月15日（木）14:00～

ムトー荘2F（205号室）

課題本

加藤陽子著　新潮文庫

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』

参加費　600円（会場使用料）

参加希望者は直接お越しください。お問い合わせは次の方々のいずれかにご連絡ください。

樋口勇雄　高橋泰宏

小島真子　大川法由記

※2月実施予定を4月に延期しました。

（三谷隆彦高退協前会長より）

中高校生への講義をもとに話し言葉で書かれています。日清・日露・太平洋戦争へなぜ突入したか。各戦争で得たものは何か。失ったものは何か。戦争前後で国民はどのように変わったか。

とても興味深い本です。いっしょに読書会で勉強しませんか。